

大人が絵本を 第18回 絵本が織りなす



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*

小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー Bibliオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事フアウンダー

絵本が放つメッセージ

絵本は多種多様なテーマを持っていて、同じ一冊でも読む人や読むシーンによって異なるメッセージを伝えています。多くの絵本に共通するテーマは、生きる力やいのちです。本連載第9回のブックスタート絵本で紹介しました『によき によき』は、そのわかりやすい一冊でしょう。赤ちゃんにとっては、音やリズムの楽しい絵本ですが、内容を読みとってみると輪廻転生が描かれています。この絵本は、発達障がいなどで、自分に迫りくる身体の変化を即座に受け入れることが難しい子どもたちへ、乳歯の自然脱落に備えた理解を促すときなどに活用できます。もちろん、大人の適切なフォローは欠かせません。



『によき によき』
多田ヒロシ 作
(こぐま社)



また、0歳の赤ちゃんから大人までの誰もが大好きな『はらぺこあおむし』も、生きる力が籠められたいのちの絵本です。他にも「ムーミン」や「ぞうのエルマー」、「14ひきのねずみ」、「からすのパンやさん」シリーズ等々、タイトルをあげると切りがありません。絵本は本当に奥が深く、探究を始めるとゴールがないのです。永遠に発見のある、不思議で荘厳優美な継承文化なのです。

絵本が織りなす生命について、とりわけ医療とのかかわりを探ってみることにしましょう。

「いのち」の絵本

日本における末期医療の権威である日野原重明先生は、「人間のいのちに触れて生と死を静かに考えさせる本は、大人や老人に必要であるが、幼少期の子どもにも、いのちの教育が必要だ」¹⁾と、日本で初のホスピスが設立された数年後の1985年から語り続けています。それは、どう死へ対応すべきかという基礎づくりであり、他人への配慮や愛を育てるためでもあるのです¹⁾。

ドキュメンタリー作家の柳田邦男氏が「大人こそ絵本を」²⁾³⁾と呼びかけ、いのちや癒しの絵本の情報を発信され始めてからというもの、いのちの絵本がクローズアップされるようになりましたし、出版点数も増えています。かつて、絵本は子どものためのものであるという認識でしかなかった時代は、死を扱ったものはそうそうありませんでした。もちろん、全くなかったわけではなく、昔話の中で描かれる「死」の話はありましたし、ロングセラーとなっている『スーホの白い馬』(1967)や『おおきな木』(1976)、『100万回生きたねこ』(1977)などの名著は現在でも万人に愛読され続けています。

教育現場では、2002年より『死への準備教育研究会』を中心に具体的な研究・研修や教育実践が始まりましたが、きちんとしたカリキュラムが作成され

『100万回生きたねこ』
佐野洋子 作
(講談社)



手にするときは！

いのちとは！ part 1

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

ないまま、それでも前向きに死についての教育に取り組む学校が増えてきました」⁴⁾。小学校で導入され始めた2000年代半ばに教材として最も活用されたのは、『わすれられないおくりもの』(1986)と『だいじょうぶだよ、ゾウさん』(2005)ではないでしょうか。



『わすれられない おくりもの』
スーザン・パーレイ 作・絵
小川仁央 訳
(評論社)



しかし、前出のロングセラーの3冊は、小学校高学年以上から大人が対象ですし、『わすれられないおくりもの』などは、抽象的で低学年向けではありません。また、これらは老いによる死に限定されたもので、小さな子ども向けの「死」の絵本がないことが課題となっていました。ちょうど時期を同じくして、90年代後半に柳田邦男氏がいのちの絵本について社会に向けて発信するようになり、老いだけでなく多様ないのちの絵本が刊行されるようになりました。

お腹の赤ちゃんが、お母さんのお臍の穴から、もうじき出会う家族の生活をのぞくというユニークな発想の『おへそのあな』は「いのちの誕生」を牽引する絵本となりました。この他、『いつか空のういで』のような子ども目線のお父さんやお母さんとの死別を取り扱ったものや、『サンタてんし3さい』など子どもや幼い友達の死がテーマの絵本が続々と刊行されるようになり、それまで絵本ではタブーとされていた死やいのちをテーマにした本が多数出版されるようになったのです。



3.11 東日本大震災

そうして、大人も子どもも絵本に新たな光を見出し、生きる力の拠り所として、絵本の可能性がより広くより深くなり始めた矢先の2011年3月11日、東日本大震災は起こりました。生きるということ、死ぬということ、いのちについて、絵本と真摯に向き合ってきた私たちは、想像を超えた悲惨な現実に苦しみもがきました。一瞬にして奪われた多くのかけがえのない、いのち。残された方々の悲しみと苦悩。私たちは辛い現実の中で、いのちの重みをひしひしと感じました。

この震災を機に、残された方たちのための絵本や、いのちの絵本が多数出版されたことは、読者のみなさまも周知のとおりです。本連載第1回で紹介しました「手から手へ展」に寄せられた絵本や、展示会で生まれた絵本など、3.11から多くの絵本が誕生しました。

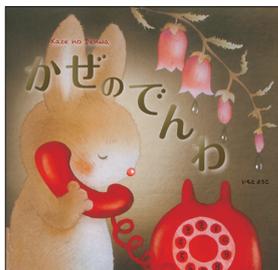
震災直後、岩手県大槌町の庭師が、犠牲者の親族らの「心の復興のきっかけになればと思います」⁵⁾、自宅の庭にメモリアルガーデンを造り、そして亡くなった大切な人に思いを伝える「風の電話ボックス」を設置した実話を元に生まれた絵本『かぜのでんわ』(いもとようこ作)は、出版当初から話題となった一冊です。ガーデンデザイナーの佐々木格さんは震災前に、がんで亡くなった親しい人の一周忌に、「思いを伝える電話があれば」という願いで電話ボックスの設置を思いつきました。そして、2010年11月、電話ボックスが初めて設置され、工事に入ったとき、東日本大震災は起こりました。この震災を機に、「突然の死で、区切りをつけられない人がたくさんいる。苦しみ、悲しみを抱えた遺族と、亡くなった人



をつなぎたい」と思い、震災から1か月後の2011年4月に「風の電話」を完成させ、その後、途切れることなく多くの人が訪れて亡くなった人と心を通わせ続けています⁶⁾。



『かぜのでんわ』
いもとようこ 作・絵
(金の星社)



この実話を、いもとようこ氏が絵本という表現媒体で世の中へ届けました。貼り絵の技法を使ったいもと氏独特のイラストは、切ない想いを美しく表現しています。悲しみややるせない気持ちが、抑えられた色彩によって温かみを増し、優しく響いてきます。悲しく切ない想いだけではなく、大切な人の存在を感じる喜びまでも伝わってきます。いもと氏だからこそ表現できたいのちの絵本です。

後日談は、まだあります。「風の電話」が全国的に話題となり、その取材に訪れた出版社の方との対談で、「大槌町では震災で図書館が無くなってしまい、子どもが読書できる環境が無くなってしまった」という話題がきっかけとなり、佐々木さんは図書館の開館に思いが至りました。もともとギャラリーにしようとしていた庭の一角に、2012年4月「森の図書館」をオープンさせるのです。絶望の中に希望を見出させてくれる「風の電話」、「森の図書館」、それに絵本『かぜのでんわ』。「自分は生かされた」という感覚になった佐々木さんが、「生かされたいのちを、誰かの役に立つことに使いたい」と捧げる取り組みです⁷⁾。



『ハナミズキのみち』

東日本大震災という哀しみのなかで、いのちの再生を語った絵本をもう一冊紹介しましょう。大震災

で深い暗闇の底を永い時間彷徨った女性が、希望の光を見つけ出したとき、世の中に送り出した渾身の絵本があります。

岩手県陸前高田市で、地震の津波によって25歳の愛息を亡くした浅沼ミキ子さんは、苦しみから一歩、歩み出したとき、「いのちの道をつなげたい」と願って、絵本『ハナミズキのみち』(金の星社)を出版しました。浅沼さんは地震が起きた直後、外出先から自宅へ戻る途中で、地域の消防団として市民を避難場所へ誘導する愛息と会っているのですが、そのまま別れて自身は自宅へ、愛息は市民と共に避難場所へ避難するのです。愛息と再会したのは、それから10日後の遺体安置所でした。浅沼さんは「ねむれない日が続き、胸が苦しくなり、呼吸困難になることが何度もありました。どうしても会いたくて、会いたくて、泣いてばかりいた日々。」そんなある日の夜、息子さんが夢枕に現れて「避難路に大好きなハナミズキを植えてほしい」と語りかけたそうです。この時から、浅沼さんの心に少しずつ前向きに生きようという気持ちが芽生えはじめ、「2年の歳月をかけて言葉をつむぎ」、この絵本が生まれました。絵本の巻末で、「亡き息子の声に教えられて、わたしは今日も生かされていることに感謝しました。」と結んでいます⁸⁾。

絵は、「ころわん」シリーズなどでお馴染みの黒井健氏によって、震災以前の家族の穏やかで楽しい日々と、突然の地震・津波による悲惨な光景、その後の暗闇、そして遺された者の役割と光射す道が、光も闇も放ちながら深みを増して描かれています。



『ハナミズキのみち』
浅沼ミキ子 文
黒井健 絵
(金の星社)



悲惨なシーンまでも、読む者にすーっと入り込んできて、言葉の少ない絵本なのですが、壮大な長編小説のようなドラマを作り、訴えてきます。ひと言ひと言、ワンシーンワンシーンを熟読せずにはられない、自己の感性を総動員してメッセージを感じ取ることのできる絵本です。

いのちと向き合う

戦後70年という節目の昨年は、戦争と平和を考える絵本など、書籍の出版が相次ぎ、いのちの絵本はますます充実の一途をみせています。一見、平和にも見える私たちの日常生活の裏には、人為的な災害も自然災害も、たくさんのキケンが潜んでいます。そのような現代社会で、未来ある子どもたちがどう生きていくか、その力を身につけるのは人生の先を行く私たち大人の責任です。過去に起きた現実を知り、キケンが襲ってきたときにどう立ち向かうか、どう乗り越えるかという生きる力を養い、寄り添い、背中を押してあげる義務があるのです。そういったキケンへの対処法を口述では理解の難しい子どもたちへ、絵本を用いることで、多種多様な体験へとつなげ、感じ、考え、対処する力を備え、すべてを統合したとき、生きる力を培うこととなります。

生きる力を養うことこそ、医療者の使命です。私たちが日々行っている保護者との会話が、実はいのちの支援となるのです。

「絵本が織りなすいのち」、
次回もお話を続けます。



文献

- 1) 日野原重明:「フレディ」から学んだことー音楽劇と哲学随想ー, 童話屋, 2000, pp.62-130
- 2) 柳田邦男: 大人こそ絵本を, 河合隼雄, 松居直, 柳田邦男: 絵本の力, 岩波書店, 東京, 2001, pp.85-87
- 3) 柳田邦男: 砂漠でみつけた一冊の絵本, 岩波書店, 東京, 2004, pp.141-188
- 4) 岡田芳廣: 学校における死についての教育の実態と実践について, 早稲田大学大学院教職研究科紀要, 6: 1-13, 2014
- 5) いもとようこ: かぜのでんわ, 金の星社, 東京, 2014, あとがき
- 6) 大槌町(Otsuchi Town Web Site)HP <http://www.town.otsuchi.iwate.jp>
- 7) 地域情報itot 復興応援企画「東北に行こう!大槌」HP <http://tohoku.itot.jp/otsuchi/21>
- 8) 浅沼ミキ子 文, 黒井健 絵: ハナミズキのみち, 金の星社, 東京, 2013, あとがき



絵本

- 1) 多田ヒロシ: によきによき, こぐま社, 東京, 2004
- 2) エリック・カール作, もりひさし訳: はらぺこあおむし, 偕成社, 東京, 1989
- 3) トーベ・ヤンソン: 絵本・ムーミン谷から(全6集), 講談社, 東京, 1988~2000
- 4) デビッド・マッキー 文, きたむらさとし 訳: ぞうのエルマー(全20集), BL出版, 東京, 2002~2012 ※1976~1994年アリス館より, 安西徹雄 訳書刊行
- 5) いわむらかずお: 14ひきのシリーズ(全12集), 童心社, 東京, 1983~2007
- 6) かこさとし: からのすのパンやさん(全5集), 偕成社, 東京, 1973~2013
- 7) 大塚勇三 再話, 赤羽末吉 画: スーホの白い馬, 福音館書店, 東京, 1967 ※小2国語教科書に掲載している出版社もあるが、ストーリーや絵は簡略化されている
- 8) シェル・シルヴァスタイン 作・絵, 本田錦一郎 訳: おおきな木, 篠崎書林, 東京, 1976 ※絶版 現在は、あすなる書房より村上春樹 訳版(2010)刊行
- 9) 佐野洋子: 100万回生きたねこ, 講談社, 東京, 1977
- 10) スーザン・バーレイ 作・絵, 小川仁央 訳: わすれられないおくりもの, 評論社, 東京, 1986
- 11) ローレンス・プルギニョン 作, ヴァレリー・ダール 絵, 柳田邦男 訳: だいじょうぶだよ, ゴウさん, 文溪堂, 東京, 2005
- 12) 長谷川義史: おへそのあな, BL出版, 東京, 2006
- 13) アンドレア・ベトルリック・フセイノヴィッチ 作, まえざわあきえ 訳: いつか空のうえで, 小学館, 東京, 2009
- 14) さはらよしこ: サンタてんし 3さい, 日本キリスト教団出版局, 2010
- 15) いもとようこ: かぜのでんわ, 金の星社, 東京, 2014
- 16) 浅沼ミキ子 文, 黒井健 絵: ハナミズキのみち, 金の星社, 東京, 2013